

2022. 1. 1

No.227

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間2,000円)



2022 すべての命が守られる社会に

あけましておめでとうございます。コロナは収束せず、オミクロン株の脅威で年が明けました。

2021年は夫が手術が難しい病気になり、病院探しから始まりました。コロナでない病気の場合は受診抑制で、最初の病院での検査から3ヶ月待たされ、3つ目の病院に入院が決まったのは9月末でした。なんとか手術を受けましたが、2回目の手術後、これからリハビリというときに肺炎になり、人工呼吸器を装着し長く外すことができず快復が遅れて、今も入院中です。



2021年10.9黒岳から見た冠雪した山々
中岳、北鎮岳（右端）

コロナにかかった人も、軽症とされた人々が、病院に入院できず亡くなったというニュースにとっても他人ごととは思いませんでした。最近になって東京都内や近郊病院で、コロナ患者病棟に空きがいくつもあったことが明らかにされました。在宅医療で支えた医師が、インターネットでどこに空きがあるかわかる仕組みがあればよかったと語っていました。ドイツやイギリスでは患者さんは、スムーズに入院できたのですからわが国でもそんなに難しいこととは思いません。各地の保健所が1994年の法改正で、847カ所から469カ所に激減したことも大きいと思います。病院とつなぐ役割を果たしたくても数が少なく対応できなかったのは悔やまれます。

コロナ禍で、職を失ったり、大学生が学費を払えなくなったりと格差と貧困が広がりました。「誰も飢えさせない」は政治の責任ではないでしょうか。

大阪の雑居ビルで起きた放火殺人事件では25人の命が奪われました。火元とされる心療内科の医院「西



2021年11月19日 ほぼ皆既月食が江別でも見ることができました。

梅田ころとからだのクリニック」は、心の不調を訴える人や、社会復帰や職場復帰をめざす人たちを支えていました。あまりにも惨く悔しいです。

「森友学園」問題で公文書改ざんを強いられて自死した近畿財務局の赤木俊夫さんの妻、雅子さん

さんが起こした訴訟で、国が「認諾」し終結させました。真相解明がされないと、また同じことが起きます。雅子さんは「夫はまた国に殺された」と怒りました。もういい加減に嘘や隠ぺいはやていただきたいです。

2005年から2021年まで実に16年間、ドイツ連邦の首相の職を務めてきたアンゲラ・メルケルさんが退任しました。福島原発事故後に原発からの撤退を決断し、また難民危機に際して積極的な受け入れをしてきたことに、批判もありましたが、私は素晴らしいと尊敬してきました。アンゲラ・メルケル『わたしの信仰 キリスト者として行動する』を読みました。政治家でこれほど言葉に力のある人はいないと思います。メルケルさんが講演で語った言葉です。「中東であろうと、その他の場所であろうと人権がきちんと守られてこそ、発展も持続していくのです。喉の渇きをいやして空腹を満たし、病気を治し、教育および職業と社会参加を保証するためにわたしたちはこの世界の発展を必要とします」「人間に生まれつき備わっている自由への憧れはテロや弾圧によって消し去ることはできない、ということです。自由を減ぼすことはできません。

(略) 平和はたくさんの人々の活動によってのみもたらされるのです」

2022年は平和で、すべての命が守られる社会であってと願います。(写真撮影もMinako)

(寄稿) アイヌ・サケ捕獲権確認訴訟 少数民族固有の権利の確立を

北海道の片隅から注目すべき訴訟が起こされている。2020年8月、ラポロアイヌネイション(旧浦幌アイヌ協会)という浦幌十勝川流域で暮らすアイヌ集団がサケ漁の解禁と漁業権の確認を求めて国と道を提訴したのである。

彼らが手本としたのは米国北西部の先住民だ。先住民は裁判闘争によってサケ捕獲権を獲得し、「サーモンピープル」として生きている。

だが、日本の闘争には高い壁が立ち上がる。それは、憲法14条の法の下での平等、その保障である13条の個人の尊重原則だ。これを超えることは至難の業だと思われる。

日本国憲法には民族に関する規定がなく、アイヌ民族に固有の権利を付与する法的根拠がない。アイヌ民族としての表出や自己同一性は、あくまでも個人の自覚と自己申告であり、これも法的根拠がない。

2019年にそれまでのアイヌ新法を廃止し、アイヌ施策推進法が制定されたが、民族としての誇りが尊重される社会の実現を図るというだけで、それを裏付ける「権利」は書き込まれていない。

一方、浦幌アイヌ集団がモデルとした米国では、連邦裁判所の判決によってインディアンやハワイなどの民族(トライブ)の存在を獲得し、合州国内の従属的国家と位置づけている。政府とトライブは国と国との関係に準じ、自治区として保障され、民族証明も厳密になされる。

浦幌アイヌが求めているのは、民族としての尊厳を守るためのサケの捕獲権だ。現在は伝統的儀式に使うために僅かなサケを捕獲しているが、知事の許可が必要だ。19年9月に無許可で儀式用サケを捕獲した

紋別アイヌ協会長が「密漁」として書類送検された。だが、民族の尊厳を冒しているのは国や道のほうだ。

18年、国連人種差別撤廃条約委員会は日本政府に対し、先住民の天然資源や土地に関する権利を十分に保障すべきと勧告している。いますべきことは、彼らの固有の権利を保障することである。(津田孝)『世界』2022年1月号読者談話室掲載文を本人が訂正しています。

コロナ禍の中、涙の第九

2021年12月25日、前橋第九合唱団によるコンサートが終わった。全国労音の呼びかけで1973年から始まった前橋の第九は、様々な困難を乗り越えつつ、なんと49回も回数を重ねてきた。私は、第一回から参加をしてきているので、このコロナの中で開かれた第九はとりわけ感慨深かった。

昨年は中止、今年は5月から練習を開始したが、途中でコロナの蔓延により中断、結局練習に入れたのは

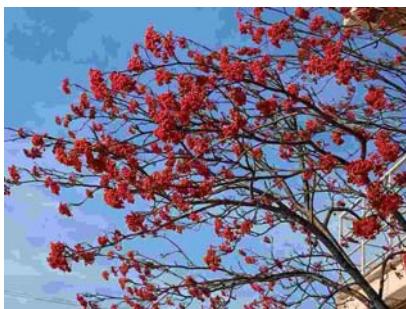
10月からだった。例年なら250人は舞台上上がるのだが、感染防止のために人数も80人程度と制限された。ということは、合唱参加者は、今までの2倍以上の声を出さなければならない。指導者からは「それぞれがソリストになったつもりで歌え」と厳命された。また、どこからも支援を受けてない団体なので、自前でチケットも1500人は売らなければならない。今年の公演は、こんな苦労の中で行われたのだ。

合唱団は、第4楽章から登場する。舞台上上がると、予想外に埋まっている座席に安堵とうれしさがこみあげてきた。1500には届かなかったが、1200人にはなっていそう。苦労したからなあ、という思いがこみ上げてくる。コロナの危険を顧みず聴きに来てくれた人に報いる合唱を聞かせなければ、という思いが強くなる。

第4楽章の演奏が始まる。その冒頭「喜びの歌」の旋律が、自信なさそうに表れてきたとき、「ああ、コロナ禍の中希望が顔を出したのだ！」と私の胸は早くも熱くなった。そして「世の習わしが厳しく隔てたものを、歓喜は再び結び付ける」と歌ったとき、「ああ、これが第九の精神で、私たちの合唱運動は、これが目的だったのだ」と更に感激が襲ってきた。「喜びに(=自由に)抱かれよ、この口づけを全世界に」。これがベートーベンの訴えたかったことだ。世界に戦争と抑圧とが、相変わらず居座っている世界へ、彼はこれを訴えたかったのだ。そしてその訴えは今の我々の訴えでもあるのだ。最後は「喜びに(=自由に)抱かれよ、この口づけを全世界に」の連続で、我々も、必死で、全力で声を上げた。そして最後に、会場が黄金の光りで包まれるような瞬間が来た。私たちは、合唱団員の少なさを補って、魂で歌った。歌い終わって49年間で初めて涙が出た。

来年は50周年になる。コロナに負けず、来年こそ、300人の歌声で1800人満席のコンサートを実現したいと、それぞれが心に誓った。

コロナ禍に負けず歴史をつなげよう「火のように酔って」我らは歌う
「神々の火花」歌い終わったその時に頬の涙は我のみにあらず
コロナ越え第九を共に歌う人「死を共にする友だち」(einen Freund gepuft im Tod)となる
困難を乗り越え第九に集いきて平和の思想の伝道者となる
「神々の火花」天より降り来りすべての人は兄弟姉妹となる
(堀泰雄・エスペラント作家、もと前橋第九合唱団団長80歳)



ナナカマドの赤い実が美しい(野幌の自宅近くで)
撮影・Minako



読者のみなさま、地元で取り組んでいる活動や関心のあるテーマで1500字以内で是非ご寄稿ください。関連した写真もお願いします。

平和をきずくひとりでありたい



2021年12月25日、イエス・キリストの降誕の日にカトリックの洗礼を受けました。(左写真)代母は藤田春美(かすみ)さ

ん。洗礼名はテレサ・ベネディクタ、アアウシュヴィッツで殉教した修道女の名です。夫澄生さんは病気で教会に通える日も限られており、代父の小野有五さんや、パク・ジョンク神父の計らいで、大きな手術を前にした5月に受洗しました。

私は学びが足りないので洗礼を希望する方たちと7月から週に1回、ミサの後で桶田達也助祭の講座を受講しました。聖書や、ミサなどの基本から、イエス・キリストの復活と昇天、洗礼と堅信の秘跡など多岐にわたりました。キリスト教の奥深さに触れてこれからも学んでいきたいと思います。

ある時、教会の運営に力を尽くしてくださっている聡子さんの提案で、『『ロザリオの祈り』をしましょう』と提案がありアヴェ・マリアの祈りをしていた時、夫が入院している病院から「食事ができるようになりましたよ」と電話があり、祈りが通じたんだと感動しました。小さなことに喜びを感じることができるのは幸せです。一人で苦しまず、神がそばにいると思えると心強いです。

フランシスコ教皇が2019年11月に訪日した時の講話を聴きました。広島のパルコ記念公園での講話「わたしは謹んで、声を発しても耳を貸してもらえない人たちの声になりたいと思います。現代社会が置かれている増大した緊張状態、人類の共生を脅かす受け入れがたい不平等と不正義、わたしたちの共通の家を保護する能力の著しい欠如、あたかもそれで未来の平和が保証されるかのように行われる継続的あるいは突発的な武力行使を、不安と苦悩を抱いて見つめる人々の声です」に深く感銘を受けました。教皇を身近に感じたこと、また2014年にアウシュヴィッツに行き、見知らぬ人の身代わりになって死んだコルベ神父のことを知ったこともキリスト教への導きだったような気がします。

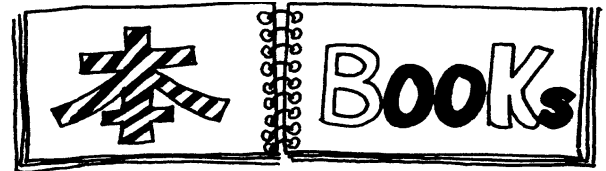
2017年に「ローマ法王になる日まで」を観ました。(銀河通信202号に書いた文章を抜粋)

アルゼンチンの心優しい青年ベルゴリオ(後のフランシスコ教皇)が史上初のアメリカ大陸出身のカトリック教会長になるまでの半生を描いています。ベルゴリオは1973年イエズス会アルゼンチン管区長になりますが、1976年から1983年まで、独裁政治に人々は苦しめられます。政府に批判的な宗教者や、多くの市民が密告などで弾圧されました。その数3万人というも驚きました。

ベルゴリオは彼らをなんとか救おうと奔走しますが、特別な英雄として描いてはいません。自分の無力さに涙を流す人間的な人柄や、その苦くて悲しい体験から毅然とした庶民派の聖職者へと成長していく姿を丁寧に描きます。ある時、貧民街で住民の立ち退き

問題が起きます。建物を取り壊そうとするのをベルゴリオは教会のトップに掛け合い、市と交渉するのです。住民の前に立ち、取り壊そうとする建設業者と渡り合う場面がありました。常に一番弱くて困っている人に心を寄せる姿に胸を打たれました。貧しい女性が「マリアさまが苦悩の結び目を解いてくれる」というと、ベルゴリオは涙を流します。人々の心に寄り添う姿に感動しました。

私もクリスチャンとして平和をきずく一人でありたいと思います。(みな子)



入管行政の人権感覚を問う

やさしい猫

中島京子著 中央公論社
2,090円



本書は入管行政を丁寧に取材。小さな家族の苦難を手にとるように描写しました。入管施設で亡くなったウイシュマさんと重なって胸が痛くなりました。400ページを超える長編小説ですが、ラストが気になって一気に読了しました。

高校生のマヤが物語の語り手。マヤさんの母はシングルマザーの保育士ミュキさん。お父さんは病気で早くに亡くなり、二人で小さなアパートで暮らしています。東日本大震災の支援活動の中で知りあったのがスリランカ人のクマさんでした。両親を亡くし、日本で専門学校を出て腕のいい自動車整備士として働いています。明るくて思いやりのある青年です。前半は二人の恋とマヤさんとの温かい交流が描かれます。やがて3人は家族になります。

ある日、当たり前の幸せが突然奪われます。クマさんは突然解雇され、責任感の強いクマさんはその間、仕事を探し続け、工事現場でも働きます。そうしているうちに滞在期限が切れてしまうのです。警察官に尋問されて、家族として暮らしていたミュキさん親子にも知らされず、入管施設に収容されてしまいます。携帯も没収されます。入管の残酷非道な状況を最近新聞で知りましたが、小説はもっとリアルに描いています。

人権派のハムスター弁護士がミュキさん親子の力になります。後半の法廷劇にハラハラドキドキ。クマさんは入管でストレスで何度も倒れます。ハムスター弁護士が救急車を呼びますが、入管は拒否します。長期の収容で病死や自殺する人がいることが、まざまざと目に浮かぶようでした。クマさんの言葉「強制送還されるか、死ぬか、どちらかを選べと言われている気がする」に入管のあり方がいらい尽くされていると思いました。移民に冷たい日本が恥ずかしいです。人の自由を奪う収容の判断が、司法機関でなく入管職員が行っている事実にも恐ろしさを覚えました。事情があって移民した人々の人権を守られる社会であってほしい。もっともっと怒りの声を上げなければと思います。

排外主義を乗り越えて未来を見つめる



彼岸花が咲く島

李琴峰著 文藝春秋社
1,925円

「砂浜で倒れている少女は、炙られているようでもあり、炎の触手に囲われ大事に守られているようでもあった」で

始まる物語は情景が目に見えるようです。台湾出身の李琴峰さんは2021年度の芥川賞を受賞しました。

ノロと呼ばれる女性たちが島を統治している設定で沖縄のユタをどことなく彷彿とさせます。島独自の掟や歴史は現代社会を強く風刺している側面もあり、登場する〈ニホン〉や〈チュウゴク〉や〈台湾〉といった国々もまた、架空の国々であり、これらは実在する「日本」や「中国」や「台湾」とは異なっています。

付近に群生する彼岸花を採りに来ていた、地元の子游娜(ヨナ)に発見された少女は、やがて目を覚ましますが漂着前のことを憶えていない。少女は海の向こうから来たのにちなんで游娜から宇実(ウミ)という名をもらい島で暮らしはじめます。游娜の友人の少年・拓慈(タツ)は女語に興味があり、ノロになりたいと思っています。しかし島のオキテではノロは女性しかできないため、拓慈は不満を抱いています。拓慈はこっそり游娜を頼って、女語を勉強しています。本書では3人の友情が描かれます。

ノロになった宇実と游娜の二人は、なぜノロは女性しかできないのか、そこには男性が支配してきた黒い歴史が理由にあることを聞かされます。重い歴史や男性による支配の怖さを知った二人は、拓慈に真実を話すのをためらいます。

島の歴史についても、男性が支配してきたことによる衰退や無惨な虐殺の実態があると分かりました。著者が言いたいのは、男性が力任せに政治を引っ張ってきたことへの警鐘となっていることが分かります。文中の言葉が多彩なため、理解できない部分もありました。著者が本書で言いたかったことがある新聞に紹介されていました。「作中の島では、かつて〈ニホン〉や〈台湾〉で迫害され逃げて来た男たちが侵略と虐殺、戦を繰り返していた。〈彼岸花〉は島が赤く染まるほど流された血の象徴です。それは薬(痛み止め)にも毒(麻薬)にもなります。あまりのおぞましさに怖くなった男たちは、歴史を女たちに渡し、政から身を引きました。その課題を拓慈に託しました」

拓慈もノロになり、住みやすい社会を女性たちと共に築いてほしいと思います。



対話するだけで心が癒される

感じるオープンダイアログ

森川すいめい著 講談社
現代新書 946円

オープンダイアログ(開かれた対話)を実践する精神科医、森川すいめいさんによる、その思想を伝える一冊。「クッキングハウスからこんにち」の会報で知り早速読みました。

オープンダイアログ発祥の国フィンランドでは、心が病気になり、困難を抱える人の8割が回復。学校や

職場、家庭や議会でも「対話の場」が開かれ大きな成果を上げて注目されています。

前半は、著者がオープンダイアログを実践するに至った精神史が語られ、その過程こそまさに対話そのものでした。著書は家族との壮絶な体験と対話の場で向き合います。この本を読んで気づくのは、自分の心に蓋をして生きてきた人は想像以上に多いということです。私自身は暴力は受けたことはないですが、人に話したら「な～んだ、そんなこと」と言われるような、小さな心の傷は残っています。

3人以上で語りあうことで、オープンダイアログを心で感じることができます。対話をする大切さが心に響きます。対話とは、他者という存在を通じて、辛さや苦しみの経験を紐解くことで、心が開放されるからでしょうか。輪になって話すだけで回復していくのが伝わってきます。

著者は、日本人医師として初めて、オープンダイアログの国際トレーナーの資格を得ました。

その実践を知り、調布市の「クッキングハウス」でも森川さんを講師に勉強会を始めたということが会報に記されていました。私もこんな対話の場があれば参加してみたいです。全国に広がってほしいですね。

文学は自分以外の存在への優しさの上に建てられている

優しい語り手



オルガ・トカルチュク著
小椋彩/久山宏一訳
岩波書店 1,980円

本書は、表題のノーベル賞受賞記念講演(2019年)と2013年の来日講演『「中欧」の幻影(ファントム)は文学に映し出される—中欧小説は存在するか』の二篇から成る日本オリジナル版です。

嘘や憎しみにあふれた情報の断片を優しさによってつなげ、神話的な力を蘇らせる「第四人称」の語りとは。絶えざる流浪、破局、全体主義を経験しながら、菌糸体のごとき独自の生長をとげた中欧文学の魅力とは。細分化する世界を星座のように再構築する新たな文学の可能性を、『逃亡派』『昼の家、夜の家』のノーベル賞作家が語ります。

「何より情報の氾濫それ自体が、時に威圧的に感じられる。くたびれ果てて、スマートフォンやパソコンから離れて、読書に没頭することがある。本をそれも小説を読んでいると、浅くなっていた呼吸が整うのを感じる。何故だろう」。トカルチュクは、「文学は自分以外の存在への、まさに優しさの上に建てられて」いるからだと言います。また「わたしは語らなければならないと信じています。世界とは、わたしたちの目前で絶えず生成しつづける生きたひとつの全体であり、わたしたちはほんのちいさな、でもそれと同時に、力強いその一部であることを語る、そういう物語を」とも言います。

たくさん情報があるけれど、心に届く言葉は少ないと感じてきました。いい文章に出会えたなど思いました。他者や、自分自身への「優しさ」を回復できるような本に触れたいです。

メディアと市民の徹底追求が
国を動かした
『コレクティブ 国家の嘘』
樋口 みな子

札幌映画サー
クル会報
シネアスト
2022年1月号
掲載



命の危険にさらされながら「報道の自由」を守り通し、権力を批判し続けたジャーナリスト、フィリピンのマリア・レッサさんとロシアのドミトリー・ムラトフさんにノーベル平和賞が授与されました。

ルーマニアでは、ドキュメンタリー映画で自分の国の腐敗を徹底的に

批判しました。日本のメディアはここまで追求しているのでしょうか。

ルーマニアで起きたライブハウスでの火災を機に、巨大な医療汚職事件の闇に迫った記者たちが真実を追求したドキュメンタリーです。アレクサンダー・ナナウ監督はナレーションやインタビューを用いず、観察に徹し、撮影に14ヵ月、編集に18ヵ月をかけたと言います。

発端は2015年、ブカレストにあるライブハウス「コレクティブ」で起きた火災でした。27人が死亡。180人が負傷します。ところが助かったはずの負傷者37人が入院先で謎の死を遂げます。監督は、「医療は万全だ」とする政府発表を疑い、調査を始めたスポーツ紙「ガゼタ」の記者トロンタンらにカメラを向けました。

命を助ける病院で何があったのか。死因はいずれも細菌感染でした。転院を希望する家族も怒りをこめて告発します。しかし病院は過失はないと、転院は認めませんでした。消毒薬を10倍近くも薄めて病院に卸していたことが判明します。病院がする行為とはとても信じられません。製薬会社、病院関係者、政府との癒着、医療制度における利権の構造を明らかにするのです。人命よりも利益や効率を優先され、不正が長年にわたってルーマニアで行われていたことに怒りでいっぱい。涙が止まりませんでした。

なぜ政府は長年にわたって嘘をつきとおせたのか？

政府はあらゆるメディアを通じて人々を沈黙させ、質問させないようにしていたのです。でもそんな見解を



疑う記者たちがいたのです。「皆が黙っていたから国家の嘘を許した」と語ったのが印象に残りました。対峙するジャーナリスト達と市民たちの姿も捉えます。内部告発した医師、登場する人々がまるでカメラを持っているかのように、自由に語っています。

火災で大きな被害を受けた女性ティディは建築家です。頭や体に重度のやけどを負い、指を切断しなければなりません。でも新しい自分を受け入れ、トラウマをアートで癒そうとカメラに自らをさらす姿に人としての尊厳を伝え心揺さぶられました。

内閣は辞職へと追いやられ、正義感あふれるヴォイクレスク保健省大臣が誕生します。後半は保健省にカメラが入ります。新任は金融スペシャリストであり、医療にも関連した福祉慈善家という民間の出身です。政治家ではなかったのに、しがらみがなく自由に発言できたのも大きかったと思います。執務室での深刻なディスカッションの場であっても、話す人を堂々と正面から捉えます。日本では考えられない



光景でした。ここまで迫真のドキュメンタリーを観たことがありません。監督の鋭い問題意識と観察力に圧倒されま

した。監督自身が優れたジャーナリストでした。

私もかつては医療の現場で働いていました。「患者の身になって医療を行う」という考え方をとことん学ばせてもらいました。映画のなかで転院を認めないシーン。数年前、我が家でも体験がありました。「セカンドオピニオンを受けたいので転院したい」と言うのと「認められません」「そうですか。それでは退院します」と私が以前働いていた病院に急患として受診したのです。おかげで家族の命を助けてもらいました。

この映画のすごさは、権力の内側にまで入り込んで、政府を退陣に追い込んだ後、どのように変革が進められたか、進めようとしたか、なぜ成し遂げられなかったのかまで追いかけて問題提起をしているところです。市民がスクープした記者たちを応援し、連帯を表明する場面が素晴らしい。監督は「映画作りはものを学ぶというプロセスでもある。観察型では人物がどう感じているのかをリアルに切り取ることができ、そこに力が宿るのだと思う」と語っています。どの場面も民主主義を体現していて感動しました。

しかしこの火災で誰一人として罪に問われていません。命よりも利益や効率が優先されたルーマニア政府に憤りを覚えました。日本の政治も問われていると思いました。

国が嘘をつくのは日本も同じです。公文書を隠ぺい、改ざん、破棄する事件が後を絶ちません。官庁の職員が改ざんを命じられ自殺にまで追い込まれました。日本学術会議の任命拒否もありました。

「コレクティブ」はライブハウスの名前ですが、「集団」「共同」の意味です。この映画では政府の腐敗を正そうと動いた告発者、ジャーナリスト、被害者たち、すべての人たちがつながっています。そこに希望が見え、社会を変えなくてはならないと思う私たちの願いとも重なり、勇気づけられました。

(c) Alexander Nanau Production, HBO Europe, Samsa Film 2019



沖縄が抱える問題を 瑞々しい文章で伝える

海をあげる

上間陽子 著 筑摩書房
1,760円

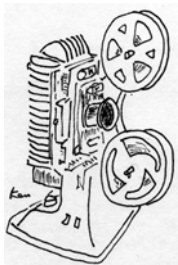
沖縄で未成年の少女たちの支援・調査に携わり、若年出産をした女性の調査を続ける著者によるエッセー集です。

沖縄県で生まれた上間さんは、琉球大学教育学研究科の教授。現在は普天間基地の近くに住んでいます。幼い娘との暮らしや、性暴力に苦しんだ少女や風俗業界で働く若者らとの対話、普天間から辺野古への米軍基地移転問題等々、沖縄が抱えている実態を12話に分け、瑞々しい文章で表現しています。

「海が赤くにごった日から、私は言葉を失った」と書く上間さん。「沖縄のひとたちが、何度やめると頼んでも、青い海に今日も土砂が入れられる。これが差別でなくてなんだろう？ 差別をやめる責任は、差別される側ではなく差別する側のほうにある」と痛烈に批判します。政府は、沖縄の要求をずっと無視しています。さらに沖縄の基地でオミクロン株によるクラスターが起きているのに、アメリカ政府にきちんと対策を取るように要望すべきなのに全くしていません。

幼い娘が発する言葉が素敵です。「ママ！風花は嬉しくて嬉しくて。風花のおなかのなかで赤ちゃんの卵たちも笑っているよ」「風花はアリエルね。お魚がお友だちで、海に土を入れる魔女をやっつけるという話ね。風花はしっぽがあって、海を泳ぐのが上手ってお話ね。魚とカメとどこまでも行くって長い長いお話ね」。その感受性の豊かさに驚きます。「海をあげる」は普天間基地の移転先として青い海に土砂投入が続く辺野古の海を指しています。そこは絶望の海になりつつあり、私たちに、もっと辺野古に関心を持ってほしいと訴えます。この海をひとりで抱えることはもうできない。だからあなたに、海をあげる。

何もできない私は、せめて本を紹介し、沖縄の人々の思いが多くの人に届いてほしいです。



他者への理解を深めて自分 を見つめなおす

ドライブ・マイ・カー

濱口竜介監督



村上春樹の短編小説集『女のいない男たち』に収録された短編「ドライブ・マイ・カー」を原作に、妻を

失った舞台俳優で演出家の家福（西島秀俊）と壮絶な生い立ちを持つ運転手みさき（三浦透子）の喪失と希望を綴った作品。カンヌ国際映画祭で脚本賞を受賞しました。

分の行動によっては救えたかもしれないのという後悔を胸に秘めています。

人間の実人生と演劇の物語が重ね合わされていき、それらがリンクし交わり、人間が生きていこうとする希望を生み出す瞬間が描き出されます。

家福とみさきが徐々に心を開いていけたのも、家福が車内で流すテープとそれに合わせて声を出す台詞を、共有したからこそでしょう。家福もまた、演劇『ワーニヤ叔父さん』のワーニヤを自身で演じる勇氣を持つことで、自己とワーニヤの哀しみを重ね、ワーニヤが娘ソーニヤの言葉に導かれるように、その言葉を自身へと染み込ませていきます。演劇という舞台においても当てはめられます。物語という虚構を演じながらも、真の演劇となるには、台詞を言い、動くことを超えた本物の息吹が生まれなくてはならない。演劇とは、虚構を演じる人間の生身の姿が真実として炸裂すること、その瞬間があるからこそ、人間の心に響くのだという濱口竜介の信念にも近い思いが、画面から伝わってきます。

みさきを演じた三浦透子が特に素晴らしかったです。車の中は対面しないから、逆に気持ちを伝えやすいのかも知れません。みさきは家福に、音（妻）のすべてを受け入れるべきだと言い、家福にも自分のすべてを肯定するように導くのです。

濱口監督はそれぞれの出演者から魅力を引き出して、心に沁みしました。

保健所の奮闘を描く



終わりの見えない
闘い
新型コロナウイルス
感染症と保健所

宮崎信恵監督

コロナ禍で医療現場がひっ迫する中で、住民の命と健康を守る公衆衛生の立場から保健所の今を伝えるドキュメンタリー映画です。

撮影は初めての緊急事態宣言後の2020年6月にスタート。10ヶ月間、東京中野区保健所に密着。第2、第3波と続く対応に追われる緊迫した状況をカメラが捉えます。

濃厚接触者の調査、自宅療養者の容体の確認、緊急入院先の調整…。多岐にわたる業務で所内の電話は鳴りやみません。中野保健所の保健師や医師だけでは対応できないので、応援の保健師もたくさん関わりました。「誰の命も守りたい」と奮闘する姿に頭が下がりました。

保健所法が1994年に、地域保健法に改悪され保健所が激減しました。その実態がコロナ禍で浮き彫りになる様さまにさまざまな感情がわきました。現場の保健師だけではとても担い切れないと実感しました。

保健師が語ります。「必死に患者に寄り添い、声を聞いたけれど、つながらなかった人も居たと思う」。やるせなさや涙ぐむ保健師の姿もありました。

この実態を多くの人、政府にも知ってもらいたいです。今は、オミクロン株が増えつつある中、岸田政権は、「保健所の充実」については全く触れていません。

たった1日だけの上映に駆け付けました。立錫の余地もない満席でした。映画サークルの仲間もいらして、いつか上映会に繋がればと思います。



不正と闘う人々の 勇気の記録

モーリタニアン
黒塗りの記録

ケビン・マクドナルド監督

2001年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロ。それから20年。アフガニスタンからの撤退で再び混乱が起こっています。

このテロの首謀者とされ不当拘禁されたモハメドゥ・ウルド・スラヒの著書「グアンタナモ収容所/地獄からの手記」を原作に、アメリカ政府が隠す、恐るべき真実に迫ったサスペンスドラマです。著書は2015年に発売されました。ところがアメリカ政府の検閲を受け、2500か所の黒塗りが残ったままだったため、全米で大きな衝撃を与えたとありました。私も是非読みたいです。

悪名高い現代の強制収容所「グアンタナモ」(キューバにある米軍基地)に不当拘禁されたモハメドゥ(タハール・ラヒム)を救おうと奔走する、人権派の弁護士ナンシー・ホランダ(ジョディ・フォスター)がモハメドゥの尊厳を守り抜き圧巻でした。

壮絶な拷問を受けながら挫けず他者への思いやりを忘れることがなかったモハメドゥをタハールが体現しました。モハメドゥをテロの首謀者と断定し、死刑にする事を命じられた、軍の弁護士ステュアート中佐をベネディクト・カンバーバッチが演じました。ベネディクトは著書を読み映画化を熱望したそうです。当初はプロデューサーに専念する予定でしたが、完成した脚本に惚れ込み、自ら出演を望んだというエピソードがあります。監督は、ドキュメンタリー映画で高い評価を受けている、ケビン・マクドナルド。

ナンシーはモハメドゥに手記を書くことを勧めるのです。ナンシーは、情報を開示するよう軍に要求しますが、送られてきたのは、都合の悪い部分は全て黒く塗りつぶされた報告書でした。とても民主国家とは思えません。

日本の国会でも、森友学園問題や自衛隊の日報問題で提出された資料が、不都合な部分が黒く塗りつぶされた報告書であり、唾然とした日が蘇りました。一方のステュアートも弁護士として、敬虔なクリスチャンとして、拷問で引きだした自白に疑問を持ち、国の命令に背き民主主義を守ろうとする姿も印象に残りました。

本物の調書にたどり着きます。モハメドゥへの拷問の記録でした。水攻め、光攻めによる睡眠剥奪、強制性交による屈辱、母に暴行するという脅しなどで自白を強要していました。あまりの残酷さに目を覆いました。2009年、モハメドゥは法廷に立ち、言論の自由を黒塗りにしたアメリカの責任を問いました。裁判で無実が確定しましたが、拘禁はその後も続き2016年によりやく解放されたのです。その期間16年。モハメドゥ本人が歌うボブ・ディランの「The Man In Me」のワンダフルフィーリングをつぶやく場面にどれほど自由を待ち望んでいたかが伝わってきて涙しました。テロの脅威を口実にどれほどの人権侵害を許してきたのか。ナンシーや、ステュアートが人間の尊厳を守るために力を尽くす姿に、胸が震えました。



揺れ動く心情を 繊細に

Our Friend/ア
ワー・フレンド

ガブリエラ・カウパ
ースウェイト監督

アメリカの一流雑誌に掲載されたエッセーを原作とした本作は、妻の死に向き合う夫、子どもたちと家族を支える決心をした夫婦の親友との、心の交流を綴った物語です。舞台俳優の妻ニコルをダコタ・ジョンソン、ジャーナリストの夫マットをケイシー・アフレック、その親友デインをジェイソン・シーゲルが演じました。マットとデインが揺れ動く心情を表現し秀逸でした。

物語はまったく違いますが、感情の機微を繊細に演じたケイシーの「マンチェスター・バイ・ザ・シー」を思い出しました。

余命がわずかであることを、娘たちにどうやって伝えようかニコルとマットが話し合う場面から本作は始まります。互いの意思を尊重しつつ、冷静でありながら少し緊張も見られる二人の様子が描かれます。そして、ポーチで待っていたデインが、娘たちの悲嘆の声を聞いて肩を落とします。この場面は本作後半で、ポーチで過ごすデインの視点からも描かれています。

前半部分では、時間軸が余命告知の前後へと何度も場面が変わります。その回数が多いので複雑に感じられますが、このことで、人生における様々な思い出を振り返る形になっています。

そこには、デインも自身の人生で行き詰っていたときにマットと子どもたちに救われたこと、ニコルとマットの夫婦関係が決してずっと円満だったとはいえないことも描かれます。それでも心揺さぶられるのは、愚直なまでの正直さと弱さを抱えているからなのでしょう。どれも宝物のように輝きだします。かけがえのない日々を送った、アラバマ州の田舎町フェアホープの景色が美しい。

私も夫の病気がどうなるか分からないどん底にいるときに観て、涙がとめどなく流れました。でも心が浄化されました。

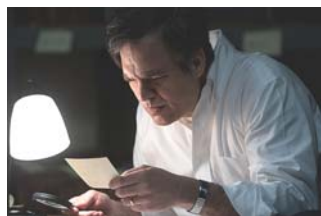


2021年11月晩秋の午前6時半、
自宅近くを散歩していたときに見た朝
焼けの美しさに息をのみました。
撮影：Minako

ひとりの弁護士の不屈の信念が大企業の不正を暴き出す

ダーク・ウォーターズ
巨大企業が恐れた男

トッド・ヘインズ監督



ひとりの弁護士の不屈の信念が巨大企業の隠蔽を暴き出す、全米を震撼させた衝撃の実話に基づく物語『DARK WATERS』。環境問題に関心が深く市民運動にも加わるマーク・ラファロが、主演し制作も兼任しました。

この映画につながったのは1本の新聞記事でした。2016年1月6日のニューヨーク・タイムズ紙にウェストバージニア州のコミュニティをむしばむ環境汚染問題をめぐり、ひとりの弁護士が10数年にもわたって巨大企業との闘いを繰り返してきた軌跡が綴られていたのです。その記事を読んだ俳優のマーク・ラファロの心を動かしたとチラシにありました。

1988年、オハイオ州の名門法律事務所で働く企業弁護士ロブ・ピロットが受けた思いがけない調査依頼。それはウェストバージニア州の農場が、大手化学メーカー・デュポン社の工場からの廃棄物によって土地が汚され、190頭もの牛が病死したというものでした。

ロブの調査により、デュポン社が発ガン性のある有害物質の危険性を40年間も隠蔽し、その物質を大気中や土壌に垂れ流し続けた疑いが判明します。

ロブが現地で見えたものは大量の牛の墓であり、工場で働く人々のがんの発生率が異常に高いこと。先天性異常のある子どもが生まれていること。資料にあるPFOAは何なのか？ロブはインターネットで調べてもわかりません。それがテフロンフライパンに含まれる化学物質と関係があるとわかります。今は使っていませんがテフロン加工のフライパンは私の身近にもあったことに気が付き背筋が寒くなりました。

ロブは7万人の住民を原告団とする一大集団訴訟に踏み切るが、巨大企業を相手にする法廷闘争は、真実を追い求めるロブを窮地に陥れていきます。デュポン社の壁は厚くロブは身の危険も感じるようになります。チツの壁も大きかったことを思い起こしました。この問題は地域の環境だけでなく世界規模の警鐘につながると信じるロブの不屈の闘いをラファロが渾身の演技で表現します。

住民の健康調査が行われますが、6年の歳月がかかるのです。その結果に勇気づけられたのもつかの間、デュポン社は7万人の賠償には応じようとしません。

巨大企業の権力と資本力の壁は今も続き、住民の闘いも続いています。

アメリカの俳優が制作した「MINAMATA」といい、この作品といい、ハリウッド映画の底力に感銘を受けました。



苦しい時も笑顔で生きようよ

そして、バトンは渡された

前田 哲監督

主人公役の永野芽郁は、NHK朝ドラ「半分、青い」で片方の聴力を失った女性を好演しました。

瀬尾まいこさんの『そして、バトンは渡された』(文藝

春秋)が、前田哲監督によって映画化されました。この本も面白かったです。

血の繋がらない親から親へトリレーされて育てられ、小学生から高校卒業するまでの間に4回も名字が変わっても、前向きに生きる優子(永野芽郁)は今は義理の父森宮さん(田中圭)と暮らしています。料理が得意な森宮さんは手の込んだごちそうを作ります。会社ではあまり人づきあいがよくないのではないかと優子が心配するほどです。料理とピアノのシーンがたくさんあり、楽しめます。

主人公役の永野芽郁が優子の優しさ、逆境に負けない強さを自然に演じとても良かったです。そして、シングルマザーの梨花さん(石原さとみ)と義理の娘・みいたん(優子の小さい頃の愛称)。二つの親子の物語として始まりますが、一つだったことが途中で分かります。ある日、優子の元に届いた母からの手紙をきっかけに、二つの家族の謎が、紐解かれていきます。優子が初めて家族の「命をかけた嘘」を知り、想像を超える愛に気付く物語です。

梨花さんは、自由奔放に結婚と離婚を繰り返しますが、みいたん(優子)に愛情をいっぱいかけて育てました。梨花さんは「泣いてちゃダメ。こういう時こそ笑っておかなきゃ。笑っていれば色々なラッキーは転がり込むの」といい優子は、その約束をずっと守ってきたのです。でも同級生から誤解されてしまいます。その気持ちがとても切なかったです。

血のつながった親子でありながら虐待で命を落とす子どももいます。血のつながりって何だろう。心と心がつながっていたら、こんな素敵な親子になれるんだと、後半は涙でいっぱいになりました。愛する人の門出を、心から祝福できる関係が素敵です。

「笑っていれば色々なラッキーが来る」という梨花の言葉は、優子に受け継がれ、同級生の早瀬くんにも届き、結婚式では優子から森宮さんに渡されていくのです。苦しい時も笑顔で生きようよ。もちろん、森宮さんから早瀬くんへとバトンが渡されます。原作とは違う展開でドラマチックに描かれていました。いい物語だなあと涙があふれました。

コロナ禍で鬱々としている方が多いと思います。深刻な映画が多かった中で、心が洗われました。

コロナで去年は入院している夫にも会えず、本人も心細い日々だったと思います。今年はコロナが収束し、自由に友人に会ったり、レストランで美味しい料理を食べたいです。何より笑顔になれる日々を取り戻したい。(み)

購読料と寄付をありがとうございます(敬称略)
2021年10.20~12.29

三島春光 松元保昭 宮崎信恵 石井たか子 高橋備中 佐藤真理 吉田雅子 芳賀孝郎・淳子 梅沢俊・節子 藤田とし子 合計2,900円と高橋備中(切手多数)は印刷と送料に使わせていただきます。

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535年間2,000円です。2022年度もよろしく願います。郵送をストップする方はお知らせください。